総論

大韓民国の亡国の危機を告発する憂国の書

西岡　力（公益財団法人モラロジー研究所教授・
歴史研究室室長、歴史認識問題研究会会長）

『反日種族主義』（以下、本書とする）は日韓関係が主題ではない。本書は、文在寅政権によって祖国韓国が亡国の危機を迎えていることに対する憂国の書だ。亡国の危機の根源にあるのが「反日種族主義」だと、韓国社会に向けて告発する書なのだ。

1　日本側の動きが欠落した慰安婦問題記述

まず、本書のもつ限界を指摘したい。あくまでも限界であって欠陥ではない。

それは、本書の主要部分を占める慰安婦問題、戦時労働者問題で、問題を引き起こした日本側の動きがほとんど論じられていないことだ。そのため、なぜ、軍が管理した公娼制度である慰安婦について、1990年代はじめ突然、日韓の外交問題になり、国連や米国議会などまで問題が拡散したのか、そして、30年あまり経ってもいまだに日韓関係を縛っているのかについて、立体的な解明が不足している。(注1)

より具体的に言うと、本書には以下のような日本側の経緯の記述がほとんど存在しない。

すなわち、

1．慰安婦問題も戦時労働者問題も古くは1960年代から日本の反日学者らが偏った観点に立って調査研究を進めた。
2．1980年代後半から90年代初めに反日活動家や弁護士が韓国まで元戦時労働者、元軍人軍属、元慰安婦を探しに行って、原告に立てて日本で裁判を始めた。
3．２の動きと平行して、朝日新聞をはじめとする反日マスコミが吉田清治証言を活用して、「日本軍が女子挺身隊として朝鮮人女性20万人を奴隷狩りのように強制連行して慰安婦として働かせた」という誤報、ねつ造報道で反日キャンペーンを行った。
4．その結果、1992年の宮沢喜一首相の訪韓時に、慰安婦問題が首脳会談の主要議題になった。そのとき、日本外務省が強制連行の有無を調べない前に謝罪するという失態を演じた。そこから、現在まで慰安婦問題と戦時労働者問題が日韓両国の外交を縛り続ける悪材料となった。
5．1992年から日本の一部学者、ジャーナリスト、政治家などが慰安婦や戦時労働者を使った反日キャンペーンが事実に反するという批判を開始し、97年頃には朝日や反日学者らも奴隷狩りのような慰安婦強制連行はなかったということを日本国内では認めた。
6．しかし、日韓の反日活動家らは北朝鮮とも協力して、韓国はもちろん、国連人権委員会、米国やヨーロッパなどで慰安婦性奴隷説を拡散させていった。

李栄薫教授らは以上のような日本における慰安婦問題勃発の経緯をほとんど書いていない。

本書の第22章で朱益鍾氏は九〇年代以降の慰安婦問題の展開は、挺対協（挺身隊問題対策協議会）と韓国政府と日本政府の相互作用だったして、こう書いている。

> 一九九〇年頃から慰安婦問題がどのように展開したのかを見てみます。この問題には、三つの行為者、すなわちプレイヤーがいます。慰安婦運動団体である挺対協、韓国政府、そして日本政府です。この三者がどのように相互作用して慰安婦問題が展開されたかに注目して下さい。（『反日種族主義』日本語版304頁、以下引用はすべて日本語版から行う）

主要プレーヤーだった、日本の反日学者、運動家や朝日新聞などの反日マスコミが抜けている。また、それらと激しく論争してきた評者（西岡）を含む日本の学者、ジャーナリスト、政治家についても言及していない。

ただし、李栄薫教授らがそれを知らなかったということではない。李教授らは拙著を含む、日本での研究書をよく読んでいる。しかし、本書では日本の動きに関する記述は少ない。

その理由は、本書の主題が日韓関係を考察することではないからだ[注2]。本書の主題は反日種族主義によって韓国に広く韓国の現代史を否定する親北反韓史観が拡散し、その結果、親北職業革命家集団が権力中枢に多数布陣する文在寅政権が成立してしまい、韓国の国是である反共自由民主主義体制を転覆しようとしているということを、歴史認識の面から告発することだったからだ。

本書は日本の多くの読者が考えているような、日韓関係の悪化を心配して出された本ではない。反日種族主義に基づく韓国現代史の否定が、韓国の国是である反共自由民主主義の否定という現在の国難を招いたことを強く憂いた、憂国の書だということを、指摘したい。

まず確認しなければならないことは、本書の副題だ。日本語版では「反日種族主義、日韓危機の根源」とされているが、韓国語原本は「反日種族主義、大韓民国危機の根源」だ。日本語版の副題は出版社である文藝春秋が李教授らと相談して決めたという。日本の読者らを意識してのことだ。

ここからも李栄薫教授らの問題意識は、日韓関係だけでなく、今の大韓民国全体が国家的な危機にあり、その根源が「反日種族主義」だと言っているということが分かる。

2　李栄薫教授の危機感、亡国の予感

本書では李栄薫教授が巻頭の「プロローグ、嘘の国」と巻末の「エピローグ、反日種族主義の報い」を書いている。そこに本書の問題意識がよく現れているのだが、日本語版に接した日本の読者の大部分は、韓国現代思想史、政治史の知識がないため、そのことを読み落としている。

日韓危機の根源という副題がついた本書の冒頭で、韓国人教授が自国のことを「嘘の国」と書いていることから、短絡的に、韓国による積み重なった嘘が現在の日韓関係の危機の

原因だという、大多数の日本人の実感を確認し、それ以上、思考が進まないかのようだ。

李栄薫教授は韓国の現状に関してこのままでは国が滅びるという強い危機感を表明している。巻頭の「プロローグ、嘘の国」で「反日種族主義をそのままにしておいては、この国の先進化は不可能です。先進化どころか後進化してしまいます。嘘の文化、政治、学問、裁判はこの国を破滅に追いやる」と以下のように書いている。

> 韓国の民族主義は、西洋で勃興した民族主義とは別のものです。韓国の民族主義には、自由で独立的な個人という概念がありません。韓国の民族はそれ自体で一つの集団であり、一つの権威であり、一つの身分です。そのため、むしろ種族と言ったほうが適切です。隣の日本を永遠の仇と捉える敵対感情です。ありとあらゆる嘘が作られ広がるのは、このような集団心性に因るものです。すなわち反日種族主義です。これをそのままにしておいては、この国の先進化は不可能です。先進化どころか後進化してしまいます。嘘の文化、政治、学問、裁判はこの国を破滅に追いやることでしょう。そのような危機意識を持ってこの本を読んでいただきたいと思います。この本は、体当たりで反日種族主義、その巨大な文化権力に突進します。（同24頁。下線は西岡、以下同）

また、「エピローグ、反日種族主義の報い」ではより具体的に「今この国は経済、政治、社会の全ての方面で危機です。」（326頁）、「亡国の予感」（338頁）、「反日種族主義は、この国を再び亡国の道に引きずり込んで行くかもしれません。」（339頁）と書いている。エピローグの最後尾の結論部分を引用しておく。

> 反日種族主義は、この国を再び亡国の道に引きずり込んで行くかもしれません。一〇九年前、国を一度失った民族です。その民族が未だにその国を失った原因が分からずにいるのであれば、もう一度失うのは大して難しいことではありません。憲法から「自由」を削除しようと叫ぶ勢力が政権を握っているではないですか。半数の国民が、彼らを支持しているではないですか。亡国の予感を拭い去ることができないのは、その原因を作っている反日種族主義の横暴に対し、この国の政治と知性があまりにも無気力なためです。（同339～340頁）

李栄薫教授がこの本を書くにあたり心配しているのは日韓関係ではなく、韓国の亡国だということがここを読むだけでもよく分かる。

下線を着けた部分を見てほしい。ここで李栄薫教授が「憲法から「自由」を削除しようと叫ぶ勢力が政権を握っている」と書いているが、これは反日種族主義に毒されたいわゆる主体思想派と呼ばれる職業革命家集団が文在寅政権の中枢部を握っていることを指しているのだ。李栄薫教授は、韓国を亡国に導こうとしている者らを「憲法から「自由」を削除しようと叫ぶ勢力」と書いている。その勢力について、より具体的に書いている部分をやはりエピローグから引用しておく。

> 何年か前に歴史学界は、この国の政治体制は「自由民主主義」である、という通説

を否定し、「自由」の二文字を削除しなければいけない、と主張しました。二〇一七年、ロウソク革命で政権を取った文在寅大統領と彼の支持勢力は、憲法から「自由」を削除する改憲案を準備しました。世論の反発が激しく、撤回するにはしましたが、条件が整えばまた推進する意志を隠さずにいます。彼らは「自由」に対し敵対的です。自由を個人の軽薄な利己心だと考えています。「自由理念を受け入れた旧韓末（韓日併合前の大韓帝国末期）の開化勢力は、その後親日派に変身し、解放後彼らは、既得権を守るため新しい帝国主義国アメリカにくっついた。そうやって造られた国が大韓民国だ。今も自由云々と言っている者たちは軽薄な個人主義者であり、親米、親日の後裔たちだ」。現執権勢力の自由に対する理解は、大まかに言って、このようなものです。（同328頁）

ここで下線を着けた部分は重要だ。反日種族主義がいかに文在寅大統領をはじめとする政権中枢、それだけでなく韓国社会全般に悪影響を与えているかを端的に表す現代史認識だからだ。その点については、本稿でじっくりと論じるが、その前に李栄薫教授が、歴史学界がおかしくなり、それにつづいて政界がおかしくなったという順序で書いていることに注目しておきたい。韓国歴史学界でまず韓国の国是である「自由」の否定が公然化し、その後、文在寅政権がそれを憲法改正によって現実化させようとしている、と書いているところだ。

李栄薫教授は「自由」を否定する人々を激しく非難した。「自由」を否定する学界と文在寅政権のあり方こそが韓国を亡国に導くとして、彼らは「他の人々の霊魂を否定し冒涜する恐ろしい異教徒」だと断定して、現在の韓国歴史学界と文在寅政権中枢を占拠した自分の後輩にあたる「民主化運動家」を厳しく断罪した。

私はいろいろな歴史関連学界の会員です。たくさんの学会誌に論文を掲載して来ました。歴史学者たちは私の同僚でした。執権勢力との関係も彼らと同様でした。一九七一年、私は朴正熙大統領の学園弾圧に抵抗し、大学から追放されました。いわゆる「民主化勢力」のメンバーシップの保有者です。私は彼らの主義と主張を内面において理解して来ました。しかし「自由」を削除しようという主張に接し、私ははっきりと目覚めました。彼らは私の同僚ではない、見知らぬ異邦人である。いえ恐ろしい異教徒である。他の人々の霊魂を否定し冒瀆する異教徒とは、共和を成すことはできません。（同328～329頁）

李栄薫教授は歴史学界の重鎮だったし、民主化運動に参加しソウル大学を退学になった経験の持ち主で、現在、文在寅政権の中枢の占めている学生運動活動家の先輩にあたる。しかし、李栄薫教授は彼らを許せないと断じるのだ。そこには、韓国がいま、亡国の危機に直面しているという切迫感がある。

3　亡国の元凶としての「反韓史観」

歴史認識がなぜ、現在の韓国政治の危機とつながるのか。そのことを正しく理解するに

は、先に引用した李教授が異教徒だと非難した「自由」を否定する歴史学者や政治家らの現代史認識に注目しなければならない。再度その部分を引用する。

「自由理念を受け入れた旧韓末（韓日併合前の大韓帝国末期）の開化勢力は、その後親日派に変身し、解放後彼らは、既得権を守るため新しい帝国主義国アメリカにくっついた。そうやって造られた国が大韓民国だ。今も自由云々と言っている者たちは軽薄な個人主義者であり、親米、親日の後裔たちだ」。現執権勢力の自由に対する理解は、大まかに言って、このようなものです。（同328頁）

旧韓末の開化勢力が日本統治時代に日本に協力した親日派となり、日本統治終了後に親日派が親米派になり、大韓民国を建国した。つまり、李承晩、朴正熙、全斗煥、盧泰愚、李明博、朴槿恵とつづく、韓国保守政権はみな、親米、親日の後裔で汚れた者らで清算の対象だとされる歴史観だ。

私はこの歴史観を、2005年に出した拙著『韓国分裂、親北左派vs韓米日同盟派の戦い』(注3) などで「反韓自虐史観」と名付けて、その危険な存在を指摘した。そして、その後ろに北朝鮮の工作があると警鐘を鳴らした。私は拙著でこの歴史観を以下のように要約して、これを克服しないと韓国の自由民主主義は守れないと書いた。

一九四八年に建国された大韓民国は、アメリカが李承晩を使い分断国家を作らせたという不純なものである。李承晩政権は親日派処断をうやむやにして親日派の軍人、警察、官僚を大量に登用した「汚れた政権」だが、北朝鮮は抗日闘争の英雄・金日成が建てたものだから民族としての正統性は北朝鮮にある。

朝鮮戦争では、そのような汚れた李承晩政権を倒して民族の正統統一政権を作る直前まできたが、アメリカなどの介入でそれが実現できなかった。

一九六一年にクーデターで政権を握った朴正熙は、日本の陸軍士官学校を卒業し満州国軍人となった「親日派」で、六五年に日本の過去の責任をうやむやにした形で日韓国交を結び日本資本の韓国侵略を招いた。

その後、全斗煥、盧泰愚政権というアメリカを背後にした軍人政権に対して民主化運動が展開されて、金大中、盧武鉉という民主化政権になりアメリカの従属から離れ北朝鮮との和解、統一への道に進んでいる。（『韓国分裂』4〜5頁）

李栄薫教授は当然のことだが、この歴史観とこれまで長期間にわたり戦ってきた。最初は学者として実証研究を進め、緻密な学術論文を発表するという形だった。後述の通り、2006年には李栄薫教授らが編集委員となり、この歴史観の誤りを指摘する学者らの論文を集めた『解放前後史の再認識』上・下を出した。2007年には『大韓民国の物語』(注4) という一般国民向けの啓蒙書を出して、この歴史観を全面的に批判した。李栄薫教授は『大韓民国の物語』でその現代史認識を、大韓民国の正統性を否定する「誤った歴史観」だとして、次のように適切に要約している。

日本の植民地時代に民族の解放のために犠牲になった独立運動家たちが建国の主体

になることができず、あろうことか、日本と結託して私腹を肥やした親日勢力がアメリカと結託し国をたてたせいで、民族の正気がかすんだのだ。民族の分断も親日勢力のせいだ。解放後、行き場のない親日勢力がアメリカにすり寄り、民族の分断を煽ったというのです。そして、そのような反民族的な勢力を代表とする政治家こそ、初代大統領の李承晩であるというのです。例えば、李承晩は親日勢力を断罪するために組織された反民族行為調査特別委員会（一九四八～九）の活動を強圧的に中断させました。そうやって生き残った親日勢力が主体になって国家建設を行ったのだから、そんな国がうまくいくわけがない。今日までの六十年間の政治が混乱を極め、社会と経済が腐敗したのもすべてそのためである、という主張です。（『大韓民国の物語』日本語版27～28頁）

誤った歴史観は、過去百三十年間の近現代史を汚辱の歴史として子供たちに教えています。すなわち、宝石にも似た美しい文化を持つ李氏朝鮮王朝が、強盗である日本の侵入を受けた。それ以後は民族の反逆者である親日派たちが大手を振った時代だった。日本からの解放はもう一つの占領軍であるアメリカが入ってきた事件だった。すると親日派はわれ先に親米事大主義にその姿を変えた。民族の分断も、悲劇の朝鮮戦争も、これら反逆者たちのせいだった。それ以後の李承晩政権も、また一九六〇～七〇年代の朴正熙政権も、彼らが支配した反逆の歴史だった。経済開発を行ったとしても、肝心の心を喪ってしまった。歴史においてこのように正義は敗れ去った。機会主義が勢いを得た不義の歴史だった、というのです。（同上330～331頁）。

4　文在寅政権の反韓史観

李栄薫教授が書いている通り、文在寅政権はまさにこの反韓史観を全面的に信奉し、その立場に立って、「積弊清算」をスローガンにして、朴槿恵、李明博政権時代の高官らを次々に逮捕していった。この歴史観から「積弊」すなわち「清算されるべき親日派の後裔」と位置づけられると、問答無用で逮捕されたのだ。

文在寅大統領がこの歴史観の虜になっていることがよく分かるのが、彼が2017年1月に、大統領選挙の公約を明らかにするために韓国で出版した『大韓民国が尋ねる、完全に新しい国、文在寅が答える』(注5) という単行本だ。文は、そこで繰り返し「自分が政権をとったら親日派を清算する。韓国の主流勢力を交代させる」と書いている。まさに反韓自虐史観そのままの主張だ。私はこれまで拙著か拙稿で何回も紹介したが、大切な点だからここでその主要部分を拙訳で引用する。

光復［日本統治からの解放を意味する、西岡補、以下同］以後、親日清算がきちんとできなかったことが今まで続いています。親日派は独裁と官治経済、政経癒着に引き継がれたので親日清算、歴史交代が必ずなければなりません。歴史を失えばその根を失うことになるのは間違いありません。必ずしなければならない歴史的運命です。（『大韓民国が尋ねる』64頁）

親日勢力が解放後にも依然として権力を握り、独裁勢力と安保を口実にしたニセ保守勢力は民主化以後も私たちの社会を支配し続け、その時その時化粧だけを変えたのです。親日から反共に、または産業化勢力に、地域主義を利用して保守という名に、これが本当に偽善的な虚偽勢力です。（同67～68頁）

一番強く言いたいことは、わが国の政治の主流勢力を交代させなければならないという歴史の当為性だ。そのように語りたいのだが、それは国民が心情的にもっとも望んでいるとしても少し嫌がる部分でしょう。だから、大清算、大改造、世代交代、歴史交代、そのような表現を使っています。既存のわが国の政治主流勢力が作ってきた旧体制、古い体制、古い秩序、古い政治文化、このようなものに対する大清算、そしてその後に新しい民主体制への交代が必要だと考えます。（同118～119頁）

日帝強占期の親日派は解放後に彼らの親日行為に対する確実な審判を受けなければなりませんでした。ところが、そうでなくて解放以後にも独裁勢力にくっついてまた権力を握り良い暮らしを維持したではありませんか。民主化になったのならば独裁時代に享受した部分について代価を払わなければならないのに、依然として今日までの良い暮らしをしています。正義に対する私たちの社会の価値基準が無くなったのです。（同165～166頁）

文が政権の座についたら日本統治時代に日本に協力した人間とその子孫、李承晩、朴正熙、全斗煥、盧泰愚政権時代、また、李明博、朴槿恵政権時代に、政権に加わったか協力した人間、それだけでなく、その時代に政治、経済、文化など全ての分野で活躍した人間を法的、制度的に裁き、良い暮らしを出来なくすると宣言している、と読める。これは恐ろしい革命家の語り口だ。文在寅は政権を取った後、この公約を実行し続けてきた。

この危険な歴史観と戦わなければ韓国は滅びる、という危機意識が本書にあふれているのだ。

5　『解放前後史の認識』の多大なる悪影響

李栄薫教授らのその危機意識を正確に理解するためには、1970年代末からの韓国現代史をめぐる論争史、あるいは歴史認識を媒介にした思想と政治の内戦的状況を知る必要がある。

そのためには、1979年から89年にかけて第１巻から第６巻までの６冊のシリーズとして出された論文集『解放前後史の認識』を検討しなければならない。

『解放前後史の認識』は1980年代から90年代、韓国の大学生、知識人社会に多大な影響を与えた本で、６冊合計でなんと100万部売れたという。(注6) 文在寅政権の中枢を占めている586世代（50代、80年代に大学に通った、60年代生まれ）の現代史認識はこのシリーズによってできた、と言っても過言ではない。

『解放前後史の認識』第１巻は1979年に出版された。当初はシリーズになることを想定

しておらず、ハンギル社という出版社の「今日の思想新書」の１冊として出版された。当時の物価からするとかなり高価な四千八百ウォンという値段だったにもかかわらず、本書は爆発的な売れ行きを示して、1985年までになんと十五万部が出た。(注7)『反日種族主義』が韓国で現在12万部出て、異例のベストセラーと言われていることと比較してもその影響力の大きさが分かる。1985年に第２巻が、1987年に第３巻が、1989年に第４、第５、第６巻が一度に刊行された。

本書第１巻が出るまで、韓国の学生運動や反体制運動には表向き容共反米は存在しなかった。反日の半分は、日本の容共的姿勢を糾弾するものだった。ところが、朴正熙大統領が暗殺される年に出たこの本は、その枠組みを大きく揺り動かす歴史認識を若者らに植え付けた。

『解放前後史の認識』第１巻の巻頭論文を書いたのが宋建鎬だ。彼は長く新聞記者として朴正熙政権を激しく批判してきた反政府活動家で、1980年5月、全斗煥将軍らが戒厳令を全国に拡大して、事実上権力を握ったとき、金大中氏らとともに逮捕されている。彼は反日を入り口にして、大韓民国は生まれたときから汚れた国で、北朝鮮こそ民族史の正当性の継承者だという、当時の学生らに歴史観のコペルニクス的転換を求める「解放の民族史的認識」と題する論文を書いた。冒頭部分にある、論文の主旨を書いた部分を訳しておく。(注8)

> この論文は、8・15が与えられた他律的産物だったという点から、我が民族の運命が強大国によってどれくらい一方的に料理され、酷使され、侮辱され、そのような隙を利用して親日派事大主義者らが権勢を得て愛国者を踏みつけて、一身の栄達のため分断の永久化を画策し、民族の悲劇を加重させたかを糾明しようとするものだ。過去もまた今も自主的であり得ない民族は必ず、事大主義者らの権勢がもたらされ民族倫理と民族良心を堕落させ、民族の内紛を激化させ、貧富の格差を拡大させて腐敗と独裁をほしいままにし、民衆を苦難の淵に追い込むことになる。民族の真の自主性は広範な民衆が主体として歴史に参与するときだけに実現し、まさにこのような与件下でだけ民主主義は花開くのだ。(『解放前後史の認識』第１巻20頁)

ここで宋は「8・15が与えられた他律的産物」であり、その結果「我が民族の運命が強大国によって一方的に料理、酷使、侮辱され」たと書いた。そして、彼が一番強調するのが「隙を利用して親日派事大主義者らが権勢を得て愛国者を踏みつけて、一身の栄達のため分断の永久化を画策し、民族の悲劇を加重させた」という主張だ。

宋論文の内容を紹介する。まず、宋は論文のなかで、日本の敗戦による日本の統治からの解放にあたって、国内の韓国人「指導層は準備をほとんどしていなかった」し、米国で外交活動を続けた李承晩、中国で臨時政府を維持しながら対日テロを実行した金九ら海外の「亡命闘士らの抗日戦への寄与は連合国からほとんど認められ（なかった）」と書いている。次に、宋は1945年から48年までの米軍政について、親日派を登用して韓国人を裏切ったと次のように批判した。

> 駐韓米軍司令官ホッジはソウルに進駐するや、旧総督府官吏の日本人を「行政顧

問」という名称でそのまま影響力を行使させ、特に当時の民衆の憎悪の的だった総督府時代の韓国人警察や官吏らをそのまま留任させることで民衆の恨みをかった。

民主主義を実践する国だと自ら言いながら、米軍政は民衆の声に全く耳を貸そうとせず、親日派、民族反逆者をそのまま登用した。この中には日帝下の特別高等係刑事として民族運動家を検挙、拷問、虐殺した反逆者も多数含まれていた。米軍政は朝鮮から日本軍国主義の残滓を清算する考えを全く見せなかっただけでなく、むしろ附日反民族行為者を保護した。（同28～29頁）

次に宋は1948年に韓国を建国して初代大統領となった李承晩を激しく非難する。李承晩は手段方法を選ばない権力主義者で、米国をバックに日本の植民地統治に協力した親日派を取り込んで、分断の固定化に繋がる韓国単独政府を樹立し、親日派処分を妨害し、土地改革を遅延させて日本統治時代に利益を得ていた地主勢力と結託した――。

宋らが提唱した自虐史観の中心にあるのが、実は「親日派」問題だ。彼らが繰り返し強調したのが李承晩政権の行った親日派処分の「失敗」だった。その部分を宋論文から引用する。

解放後、反民族附日協力者を粛正せよという国民の世論が湧き上がったが、周知のように米軍政はこのような世論を無視し、李承晩は米軍政に追従し親日勢力を庇い、保護した。高まる国民世論により制憲国会は反民族処罰法を制定したが、親日派は「大地倶楽部」という団体を組織し、李承晩の支持を受けて、親日派粛正を主張する者は「共産党の走狗」だと脅迫した。李承晩は国会から回付された反民族行為処罰法案（反民法）を拒否することにしたが、米の供出制実施に関する法案が拒否されそうなのでやむをえず通過させたが、1949年1月から親日民族反逆者の一覧表を作成する等、反民特委の活動が始まるやいなや、警察側で反民特委関係者の暗殺陰謀が企まれるし、この間に愛国志士を拷問・虐殺した日帝の特別高等係刑事盧徳述が逮捕されると、李承晩は特委調査委員を呼び、盧徳述は建国功労者だから釈放しろと要求した。特委が抗日愛国者を拷問・虐殺した者を到底釈放できないと拒絶するや、李承晩は同年2月15日に特委活動を非難する談話を発表し、行政府内の反民族行為者調査への協力を拒否した。

李承晩のこのような非難と妨害と脅迫にも拘わらず、特委は愛国志士を逮捕・拷問・虐殺した特高係刑事らをはじめ、反民族行為者を逮捕し続けた。特委がついに同年6月6日ソウル市警の査察課長（現在の情報課長）崔雲霞と鍾路署査察主任趙應善を連行するや、警察は政府の了解の下で反民族特委を包囲し、特警隊（反民特委所属警察）を武装解除し、特委職員をやりたい放題に暴行し、連行、拘束した。これに対して、特委委員長金尚徳をはじめとする特委調査委員と特別裁判官、特別検察官などが辞任し、反民特委活動を過去に反対していた法務部長官李仁が委員長になり、特委活動の幕を下ろしたのだ。

国民の絶対的世論にしたがって着手された親日反逆者に対する民族的審判は、こうして李承晩の反対によって挫折し、これにより警察をはじめ各界に根を張っていた悪質な親日反逆者たちは大手を振って歩けるようになり、その後に彼らは李承晩政

権を維持するためこの国の民権を弾圧し［た］。（同34～35頁）

宋らの主張の中心にあるのが、この「親日派」問題だ。ここでいう親日派とは、単純に日本に親近感を持っているという意味ではなく、日本の統治に協力して民族の独立を阻害した勢力という意味だ。彼らが繰り返し強調したのが、李承晩政権の行った親日派処分の「失敗」だった。

具体的には、「反民特委（反民族行為特別調査委員会）」問題だった。やはり、『解放前後史の認識』第１巻でも宋の総論の後、各論として２本の論文がその問題を集中的に扱っている。すなわち、呉翊煥「反民特委の活動と瓦解」と林鍾国「日帝末親日群像の実態」だ。林鍾国は在野の歴史家で、執念深く親日派問題の調査研究を進めていた。彼は日本統治時代の記録を細かく調査し、特に大東亜戦争末期に日本に協力する言動を少しでも行った文学者、知識人、官僚などの膨大なリストを作って、糾弾する作業を行っていた。彼の死後、その作業は民族問題研究所に引き継がれた。同研究所は挺対協と並び、反日運動の中心組織として韓国社会に莫大な影響力を及ぼし続けてきた。

7　『大韓民国の物語』で反韓史観に反論

実は、盧武鉉大統領も弁護士時代に『解放前後史の認識』を耽読したという。(注9) 盧武鉉は大統領に就任後の2004年7月に、「反民族行為特別調査委員会を解体して以来、誤った歴史を正すことができず、これまで遅延されている。誰かが、同問題を解決しなければならない」などと述べて自身の歴史観が、宋らが主張した韓国否定の歴史観であることを公的に表明した。

その歴史観に立って盧武鉉は大統領直属の「大韓民国親日反民族行爲真相糾明委員会」を作った。その初代委員長は『解放前後史の認識』第２巻の主要執筆者である姜万吉だった。同委員会は親日反民族行為者として1006人の名簿を公表した。

李栄薫教授は盧武鉉政権が親日派調査を国家事業として始めたことに危機感を持ち、2005年頃から、『解放前後史の認識』が韓国社会に拡散した反韓史観に対する全面的な反論活動を展開した。

李栄薫教授は2005年1月に、韓国の歴史教科書が反韓史観に毒され偏向しているという危機感から、仲間の学者らと教科書フォーラムという団体を結成して、歴史教科書是正運動に立ち上がった。そして、その理論的バックボーンとして、李教授が編者になり2006年2月に、『解放前後史の認識』を学問的に全面批判する『解放前後史の再認識』(注10) という上下二巻の論文集を出し、その内容をもとに2007年4月に李教授が一般向けに書き下ろした『大韓民国の物語』（日本語版は2009年3月に文藝春秋から出版）を出版して、左派が広めた反韓史観への本格的な戦いを開始した。今回の『反日種族主義』はその活動の延長線上で出されたものなのだ。

『大韓民国の物語』のなかで、李栄薫教授は宋らの危険な歴史認識について大略、次のように批判を行った。

李承晩大統領が近代国家建設をするに当たって、必要とした官僚、警察、軍人などになり得る知識と訓練を受けていた人材の大部分は日本統治下に教育を受け、テクノク

ラートとして日本の統治に加わっていた者たちだった。それ以外に人材はいなかった。そして、彼らが身につけていたのは近代的国作りに関する知識であって、それは日本が欧米から導入した人類普遍的知識だった。彼らが韓国建国後も再び日本の支配を望み、そのために活動したなら「親日派」だが、そうではなく、身につけた知識を韓国建国のために使ったのだとすれば愛国者だ。

1954年李承晩大統領は、植民地時代に高官を勤めた者でも建国事業に参加して功績を挙げたなら、その者はすでに親日派ではないが、植民地時代に目立った親日活動をしていない者でも内心、再び日本が帰ってくることを待つならその者が清算されるべき親日派だ、という内容の声明を出した。

親日派問題について、本書では「15章　親日清算という詐欺劇」で朱益鍾氏が簡潔に次のように整理している。

> 反民族行為者の処罰が思うように進められなかったのは、親日派に勢力があったからではありません。それは、反民族行為者の処罰よりもっと急がれた国家的課題があったからです。当時済州島では南労党（南朝鮮労動党，共産党）の武装蜂起が鎮圧されておらず、麗水と順天では駐屯国軍の反乱まで起こりました。新生大韓民国が共産勢力の蠢動で転覆の危機に追い込まれているというのに、反共闘争の最前線にいる警察幹部たちを反民族行為者として処罰することはができませんでした。反民族行為者の処罰よりも共産勢力との戦いがより重大かつ緊急だったため、李承晩大統領は反民族行為者の処罰を止めました。反民族行為者を処罰できれば良かったのですが、もっと急がれた共産勢力との戦いのため、そうすることができなかったのです。（『反日種族主義』179～180頁）

8　李命英教授の「反韓史観」批判

この『解放前後史の認識』が広めた「誤った歴史観」を韓国でいち早く告発したのが北朝鮮研究の大家である故李命英教授だった。李命英教授は1990年代に『解放前後史の認識』が広めた「誤った歴史観」を「反韓史観」と名付け、北朝鮮の対南工作の変化がその後ろにあることをいち早く喝破していた。

李命英教授は1996年に「反韓史観」を、以下のように的確に定義していた。[注11]

> 反韓史観の要点は大韓民国は反民族的勢力が立てた国であって米帝の植民地として初めから生まれてはならない国であり、北朝鮮は抗日愛国勢力が建てた人民主権の国であって北朝鮮中心に一日も早く統一が成し遂げられてこそ朝鮮民族の将来が保障される。（『現代コリア』1996年12月号、29頁）

> 韓国は親日・親米の民族反逆者がその利益のために建てた国であり、米国の利益に奉仕する植民地であるから直ちに無くさなければならない国であり、北朝鮮は金日成が抗日武装闘争の唯一革命伝統を継承し唯一思想である主体思想を国是とする国であるから、民族の正統性は北朝鮮に具現されている。（同30頁）

李命英教授はこの反韓史観が韓国社会に広がっていく過程を1960年代からだとして、「統一革命党が組織される過程（六〇年代）とその後（七〇年代）に…大学、学界、宗教界、労働界、言論界に広く深く浸透していった。特に八〇年代にはドイツを拠点とする工作ラインが学界と労働界に相当な作用を及ぼした」（同29頁）と鋭く分析していた。

その上で、『解放前後史の認識』がベストセラーになっていた1985年に、北朝鮮が対南工作機関である「統一革命党」の対外名称に「革命」という語を取り除き、「民族」という語を使った「韓国民族民主戦線（韓民戦）」に変更したが、それは反韓史観拡散の結果だった、と指摘した。李命英教授は、「反韓史観」に毒される前の昔の韓国の左翼は社会主義共産主義を信奉していたから、北朝鮮が社会主義に失敗すれば支持しなくなる、しかし、反韓史観に取り込まれた今の左翼は北朝鮮の社会主義が失敗しても盲目的に支持する、この状況は北朝鮮にとってとても有利だと、次のように警鐘を鳴らしていた。

> 北朝鮮に金父子の体制が存続する限り、北朝鮮が主体の旗を振っている限り、彼らはただひたすらに北朝鮮を憧憬し支持するのだ。北朝鮮の社会主義がめちゃくちゃになっても彼らにはそうは見えない。これが韓国左翼の第一の特徴だ。この状態は北朝鮮にとってみれば願ってもないことだ。朝鮮労働党の韓国地下党である統一革命党は一九八五年七月から対外名称を韓国民族民主戦線（韓民戦）とし、その韓民戦が一九八七年三月に「救国宣言」を発表したとき「南朝鮮の今日の情勢は八・一五解放後より良い」と断言した。これは韓国の左翼勢力が主体思想一色に武装されたこととその組織が大変強化されたことを喜んだのである。（同上26頁）

９　日本発の慰安婦問題に韓国保守派が沈黙

『解放前後史の認識』では親日派処分問題が中心課題とされた。しかし、合計６巻出された同シリーズでは、慰安婦問題はまったく触れられていない。『解放前後史の認識』の最後の巻である第６巻が1989年に出版されていることに注目しなければならない。そのときまでの「反韓史観」では、慰安婦問題は争点ではなかったのだ。本来なら、日帝の悪辣な統治の象徴として朝鮮女性を多数性奴隷にしたことを非難し、解放後もその問題が解決されなかったのは親日派が処分されず権力を握り続けたからだ、という論難があってもおかしくないはずだ。89年の時点までは韓国の親北左派さえ、慰安婦問題に関心がなかったことがよくわかる。慰安婦問題は日本人が起こしたという私の主張が、ここからも証明される。

親日派処分問題を契機にして80年代に学生運動活動家らが「反韓史観」に毒されていったが、それに対してなら、李命英教授などがしたようにその後ろに北朝鮮の政治工作があると、韓国の保守派は反論できた。また、李承晩政権が当時から主張していたように、目の前の共産勢力と戦わなければ大韓民国そのものが倒されてしまうという危機の中で、日本時代に専門知識を身につけた者を排除する余裕がなかったという反論も可能だった。

ところが、90年代初め、本稿冒頭で見たような経緯により日本発で慰安婦問題が日韓

間の外交懸案となった。女性の性に関する問題であり、日本人の一部が先に謝罪運動を始めている中、韓国の保守派は慰安婦問題に対して沈黙するか、「反韓史観」に便乗して日本批判を強めた。

性奴隷などではなかったという事実をよく知っていた、日本統治時代を生きた年長の学者、ジャーナリスト、政治家は私などに個人的に会うと、当時は朝鮮も貧しかったから朝鮮人女衒にまとまったカネをもらって娘を身売りする親が多数いたと話していたが、それを公開の席で書いたり、話すことは大きなタブーがあってできなかった。

統治時代を知らない今の70代以下の韓国保守派では、事実関係を深く調べることなく左派の「反韓史観」にもとづく日本非難に加勢する者が多かった。一部の良識的保守派は私たち日本の保守派が主張していることをよく知りながらも深い交流を続け、慰安婦問題には沈黙を続けていた。特に、朴槿恵大統領のような保守政治家は、慰安婦問題で日本を批判しないと左派から「親日派の後裔」「清算の対象」だとレッテルを貼られるというコンプレックスがあり、左派よりもあからさまに反日的言辞を弄することもよくあった。

李栄薫教授も2007年に書いた『大韓民国の物語』では、反日史観が韓国に及ぼす悪影響をいまほど、強く認識していなかった。亡国の危機ではなく、「歴史問題で風邪を引いている」と書いた。

> 大韓民国は「歴史問題」で風邪をひいています。かからなくてもいい風邪に意味もなくかかっているのです。だから余計に体と心が痛いのかも知れません。風邪の原因は誤った歴史観です。歴史観を明るく健康的なものにすれば、風邪はたちどころに治るでしょう。悪夢にうなされていたものが、たちどころに明るい陽ざしの朝を迎えた気分になるでしょう。人々の歩みには再び活気が満ちあふれ、笑顔でお互いに親切にしあえる社会となること請け合いです。だから歴史観を正す必要があるのです。（『大韓民国の物語』330頁）

この時点での李栄薫教授の主敵は、『解放前後史の認識』が作り上げた「反韓史観」だった。だから、歴史学者としてきちんとした研究をわかりやすく発表すれば、韓国社会は正常化すると楽観していたのだ。

10　保守派が種族主義と戦わなければ亡国

しかし、『大韓民国の物語』の序文にあたる「書の扉を開くにあたり」で李栄薫教授は「文章を書くときに自己検閲をかけるようになった」と、韓国社会が日本を論じる際に大きなタブーがあることを認めていた。そのタブーはやはり、90年代初め慰安婦問題が勃発して以降、強力に働くようになった。李栄薫教授の自己検閲に関する文章と、慰安婦問題に関するタブーに触れている文章を引用する。

> いつの頃だろうか。文章を書くときに自己検閲をかけるようになった。文章を書く人間が、文章の論理と実証性を厳密に考慮するのではなく、「このような言葉を使っても良いだろうか」と余計な心配をして論点の核心をぼかしたり、表現を曖昧なもの

> に変えてしまうのが自己検閲である。書いた文章を知り合いに読んでくれと頼んでも、論理と実証とは無関係の細かい表現をめぐって、「日本びいきの右派にされてしまう危険性がある」というありがたい指摘を受けることがある。それもやはり自己検閲ということでは同様である。この場合の検閲者とは韓国の横暴な民族主義である。すでに何人かがその検閲に引っ掛かり、散々な目に遭っている。そもそも事前に掲示された客観的な基準があるわけではない。ひたすら人民裁判式に責め立てられるのみである。裁判にかけられた者は謝罪したり、隠遁したり、逃げ出すしかない。実際に裁判にかけられる者もいる。（同15頁）

> 私が見るところ、韓国において、慰安婦研究と市民運動は、朝鮮の純潔なる乙女の性を日本がほしいままに蹂躙したというたぐいの大衆的な認識をバックにしており、いまや一個人としてこれに逆らう勇気を出すのが難しい、権威と権力として君臨しているようです。（同176頁）

そして、『大韓民国の物語』では慰安婦問題について自身がテレビ討論で語った発言で激しい非難を受けた事件を書きながら、非難を行った挺対協などについて正面からの批判をせず、「性奴隷説」を支持すると書いていた。

『大韓民国の物語』と本書を比べると、慰安婦に関する位置づけが異なることが分かる。『大韓民国の物語』では慰安婦の実態に関する記述は、どこか歯にものがはさまっているかのような、不自由さを感じる。李栄薫教授は『大韓民国の物語』では、慰安婦は性奴隷だと書いている。

> 募集の文句に惹かれて慰安所に向かった女性たちの列が絶えなかったことは、つまり日本軍と総督府が共謀した犯罪行為でした。慰安所の女性たちは行動の自由がありませんでした。定期的に衛生検診を受けねばならず、自由な外出は禁止されていました。女性たちは性奴隷に他なりませんでした。（同148頁）

テレビ討論会で慰安婦募集に朝鮮人女衒が関係していたと指摘したことに対して、当時、李栄薫教授は激しい批判にさらされ、ついに、元慰安婦のところに行って謝罪するという屈辱を味合わされた。その経験を書きながら、慰安婦運動を進める反韓勢力について『大韓民国の物語』では全く批判がされていない。率直に言って、『大韓民国の物語』の時点では李栄薫教授は慰安婦問題について「自己検閲」をかけていたと感じる。当時、『大韓民国の物語』を読んだ評者（西岡）は、李栄薫教授でさえも慰安婦問題のタブーの前で、立ち止まらないではいられないのかと、深く息を吐いた記憶がある。

ところが、本書では「慰安婦制は民間の公娼制が軍事的に動員・編成されたものに過ぎません」（258～259頁）、「私は、（略）性奴隷説に賛成していません」（287～288頁）とはっきり書いている。ここを読んで評者は涙が出た。

李栄薫教授は、本書で韓国保守派に対して重大な問題提起をしている。反韓史観の拡散により韓国の体制は危機を迎えている。反韓史観の後ろには北朝鮮の政治工作がある。そこまでは多くの韓国保守派も同意し、反韓左派を強く批判する。

しかし、ことが日本に対する問題になると、文在寅政権が反日キャンペーンを行うと、事実関係をきちんと確かめず一方的に日本批判の側につく保守派が多い。左派ではない学者も保守野党政治家も、保守新聞さえもが反日を前にするとみな、凍り付いたように同調する。李栄薫教授は、それこそが左派だけでなく、保守派を含む韓国人全体を縛っている「反日種族主義」だと、警鐘を鳴らすのだ。むしろ、文在寅政権を批判する保守派が、事実に反する反日扇動を批判せず、同調、便乗する姿に、韓国の亡国の危機を見るのだ。

この警鐘に韓国国民がどこまで真剣に耳を傾けるのか、それが韓国の未来を決める試金石だ。(注12)

注

1　西岡力『増補新版よく分かる慰安婦問題』草思社、2012年。『朝日新聞「慰安婦報道」に対する独立検証委員会 報告書』2015年。泰郁彦『慰安婦と戦場の性』新潮社、1999年など参照。

2　李栄薫教授は2019年11月21日、東京で行われた記者会見で、同書の主題は日韓関係ではなく韓国人の自己批判だと次のように語っている。

日本人記者の質問「韓国人の反日感情の分析は納得できる部分があった。植民地支配の責任についての日本の責任の記述があっさりというか、あまりないと思った。日本の植民地支配の責任はどれくらいあるのか。それに対する戦後清算のありかた、支配の清算のしかたはどうあるべきだと思うか」

李教授「私は長い研究生活を通じて1905年から10年の日本と朝鮮の変化についてたくさん考えてきました。大韓帝国の滅亡と日韓併合は20世紀の東アジアを決定する歴史的な大きな変化だった。日本もその後、帝国主義の時代に入っていった。日本が大陸に進出し中国が共産化した。不幸にして大韓帝国が滅亡したことは韓国人の歴史的責任があると考えている。（日本の責任については）いろいろな研究があるので、私がこれについて言う必要性を感じていない。この本はあくまで韓国人による責任と韓国人の自己批判の本である」

3　西岡力『韓国分裂、親北左派vs韓米日同盟派の戦い』扶桑社、2005年。西岡力「韓国をダメにした甘えの構造と反日日本人」『正論』2017年2月号、産経新聞社。

4　李栄薫著、永島広紀訳『大韓民国の物語』文藝春秋、2009年。韓国語原本は韓国で2007年に刊行されている。

5　文在寅著、ムン・ヒョンリョル編『大韓民国が尋ねる、完全に新しい国、文在寅が答える』21世紀ブックス、2017年、韓国語。日本語版は刊行されていない。引用はすべて西岡訳。

6　『大韓民国の物語』30頁

7　読売新聞1985年6月13日

8　以下引用は全て拙訳。なお、在日朝鮮人学者らが影書房から1988年に第１巻の邦訳を『分断か統一か－韓国解放前後史の認識』という書名で出しているが、 訳文が原文に忠実ではないのでここでは韓国語原本からの西岡訳を使う。なお、西岡は翻訳にあたりハンギル社が2004年に出版した新装版を底本とした。引用のページ数も新装版のものだ。

9　『大韓民国の物語』30頁

10　朴枝香・金哲・金一栄・李栄薫編『解放戦後史の再認識』（1・2）、チェクセーサン、2006年、韓国語。

11　李命英著、荒木信子訳「韓国の「反韓」史観」『現代コリア』1996年12月号。韓国語原文は『北韓』1996年10月号、北韓研究所に「韓国左翼勢力の思想的基底」という題で掲載されている。

12　『反日種族主義』出版の前後から、韓国保守派の中で反日に反対する「アンチ反日」の動きがさまざまなところで顕在化している。詳しくは拙稿「「反日」の本質を暴く：アンチ反日との思想的内戦」『正論』2019年10月号、「韓国大法院判決に日韓弁護士が批判声明 著名韓国人弁護士も立ち上がって連携表明」『正論』2020年3月号など参照。